

他方、中国憲法史では、1949年中国人民政治協商会議共同綱領第5条、1954年憲法第90条で「居住、移動の自由」が規定されたが、その後に制定された憲法では、現憲法に至るまで、そのような規定は存在しない。

このように各国の憲法規定は異なるものの、ベトナムにおける「居住、移動の自由」の実態を知るためには、旧ソ連、中国など社会主義国の居住制度の實際を考察することが、歴史研究としては重要である。

本書に対しては、技術的な要望がある。ひとつは、各章の分量などの配置も含め、章別編成の仕方をもっと工夫する必要がある。いまひとつは、叙述において改行が少ないことに起因して、読みにくい箇所がある。この点では、改行を多くするなど読みやすくする工夫が求められる。

おわりに

外務省では時おり著者のような外交実務家として日々の仕事をしながら、優れた研究を行なっている人に出会う。

1990年代中頃、日本政府がベトナムへの法整備支援を始めた当初、その主体は法務省ではなく外務省、JICAであった。外務省の担当者は松谷浩尚さんという方であった。松谷さんはトルコ語及びトルコ社会論の権威であり、著書も多数あり、東京大学などでも非常勤講師として教鞭をとっていた。松谷さんに「いつ論文を書くのですか」と尋ねると、「土日だけでも結構進みます」と答えた。著者には、さらに多くのベトナム論をまとめてほしいと願っている。

引用文献

杉浦一孝. 2006. 「ロシア連邦における移動の自由と憲法裁判所」『名古屋大学法政論集』(213): 395–421.

服部志帆・小野 環・横谷奈歩編. 『アートと人類学の共創—空き家・もの・こと・記憶』水声社, 2023年, 376p.

木村大治*

いま私はこの原稿を、瀬戸内海に浮かぶ愛媛県大三島の実家で書いている。私はここで中学生まで育ったが、そののち島を出て今治の高校に通い、以後島に定住することにはなかった。父母が高齢になり島で生活できなくなったので、2002年に横浜の兄の家の近くに転居した。そしてこの家は空き家になることになったのだが、私はここをそのまま朽ち果てさせるのが何とも残念だった。そこで年数回、研究仲間を連れてきて合宿をしたり、子どもと一緒に滞在したりして何とか維持してきたのである。そして4年前、60歳で早期退職をした後は、月の1/3ほどをここで過ごしている。母の嫁入り道具であろう桐の箆箆があったが、もう使うこともないので処分することにした。しかしそれがなかなかできない。そこで私は息子を島に呼び、一緒に箆箆を家の裏の畑に持って行って火をつけ、「お焚き上げ」をした。息子にも母の歴史の一部とその終わりを見届けてもらいたかったのである。焼けた灰の中の飾り金具は、拾って父母の形見の品々の中に加えた。一いまだ

* 京都大学名誉教授

本の田舎では、こういったことはごく普通の風景である。私の家の近くでも、家々の半数は廃屋になり、そこに残された歴史も朽ち果てつつある。

前置きが長くなったが、本書は香川県の山間にある塩江^{しおのえ}の空き家・旧藤川邸を舞台に、そこに残された「もの」「こと」「記憶」を調査する人類学者と、それらを素材にアートを実践しようとする美術家たちの記録である。内容を見てみよう。第Ⅰ部は「アートと文化人類学の共創」と題して、本書の編者3人がそれぞれの立場からプロジェクトについて語っている。第1章¹⁾で人類学者の服部志帆は、「空き家と残された『もの』からたどる生活誌と地域再生」と題して、旧藤川邸の歴史とそこにある「もの」たちについて詳細に記述している。服部は生態人類学をバックグラウンドとし、カメルーンに住む狩猟採集民バカ・ピグミーを対象にした長い調査経験を持っている。その経験に裏打ちされた、邸内に残された「ホコリ」や「スズメバチの死骸」までも採集しナンバリングするという執拗な調査姿勢は、読者を圧倒する。そして旧藤川邸を中心とした塩江の歴史―「こと」たち―の詳細な記述は、地域史としても秀逸である。第2章を執筆した美術家の小野環は、長年尾道市で空き家再生プロジェクトに携わってきたが、「いにしによる」²⁾と名づけられた旧藤川邸のゲストハウス化構想にかかわ

り、次いでそのプロジェクト内容を高松市の瀬戸内海歴史民俗資料館において展示した。その経験を「空き家と残されたものたちをめぐって」という題で綴っている。そして3人目の編者である美術家・横谷奈歩は、ロンドンで服部に出会って以来、本書のテーマであるアートと人類学の共創に関するさまざまな試みをおこなってきている。第3章「分野の横断とさまざまな継承のかたち」に記されている、塩江に作られたダムをテーマにした「ダムカレー」³⁾、「しおのえ今昔」と題した古い写真と同じ場所・同じポーズで撮影する写真の制作、塩江のタヌキたちが女子会を繰り広げる《タヌキ会議》のインスタレーションなどは、うーんと首をひねりそして笑ってしまう陽気なイベントである。

第Ⅰ部と第Ⅱ部の間にはインターミッションとして、旧藤川邸に残された「もの」たちのカラー写真と、服部による《タヌキ会議》など3編の創作童話が挟み込まれている。それに続く第Ⅱ部は「空き家再生プロジェクトをめぐって―それぞれの視点から」と題して、旧藤川邸再生プロジェクトにかかわった人々の活動が綴られている。そして巻末に、旧藤川邸の家主のインタビュー、プロジェクト参加者の座談会、旧藤川邸関連年表、空き家に残されたものの目録が収められている。

ここまで紹介してきた本書の構成について、すこし意見を書かせていただきたい。本書は通読すればその内容は明確に読み取ることができるのだが、冒頭から読み進めていくと、「これは一体何の本なのか」ということがやや理解しにくい。本書成立の経緯につい

1) 本書には章のナンバリングはされていないが、ここでは便宜上つけさせていただく。

2) 「去にしに寄る」、すなわち「(村の人たちが) 帰りがけに寄る」の意。

ては、第Ⅰ部第3章の横谷の文章が一番わかりやすく、これを冒頭を持ってくるなどの工夫があってもよかったのではないと思う。また、表題『アートと人類学の共創』も、一見して内容が想像しにくい。副題と主題を入れ替えた方がよかったかもしれない。今後、本書に引き続くプロジェクトや出版があるなら、参考にしていただければと思う。

さて、本書を読んでいて誰もが心に浮かべるのが、残された「もの」たちはなぜこのような強い力を持つのか、という疑問だろう。服部は座談会で「面白いだけじゃなくて、何か駆り立てられるような気持ちになるというか、そこに気持ちが引っ張られていきました。」(p. 264)と語っている。そしてさらに不思議なのは、自分自身の過去にかかわる「もの」だけではなく、自分の知らない他者の過去にかかわる「もの」もまた、強い懐旧の情を引き起こすということである。私が最初にそのことを意識したのは、中学生の頃に父の本棚から見つけた、柳田國男の『火の昔』[柳田 1970]を読んだときであった。人間生活に欠かせない火にまつわるさまざまな事柄が、行燈、蠟燭、松明、灯籠、ランプ…と、柳田の博学に任せるままに綴られたこの本を読むと、私はとても「懐かしい」気持ちになってきた。そして、自分が行燈や蠟燭の時代を知らないのに、なぜそのように感じるのだろうかということを不思議に思ったのである。アフリカでの調査でもそのようなことがある。村の人たちに「私たちの祖先はあそこの河を渡って移住してきたのだ」とか「昔はこのようにして人を葬ったのだ」といった話

を聞いたとき、本来自分には何の関係もないそれらの事々を、何とか記録に留めておかねばならないという気持ちになったのである。

自分自身や、身近な人たちの過去にかかわる事柄が懐かしく、保存しておきたいというのは、(あまり進化心理学的になるのとも気が進まないが)理屈としては説明できるだろう。そのことが将来、何らかの形で有用な知識として役立つかもしれないからである。しかし、そういった「利」の及ばない他者の過去に対する懐かしさというのは、簡単に説明できることではない。それは人類が「文化」というものを抱え込んだときに、自他にかかわらずそれに価値を付与し保存しようとする性向を持つに至ったということなのかもしれない。

そしてそういった「懐かしさ」こそが、民俗学や文化人類学を駆動する力になっただろうこともまた確かである。かつての人類学批判の流れの中で、そういった感覚は「劣った文化」を救い上げてやろうという姿勢から生じるとされ、「サルベージ人類学」とか「エントロピックな語り」といった名のもとに批判された[太田 1998]。消えゆくものへの旧懐が、調査するものとされるものの間の非対称な関係に結びつきやすいことは確かである。しかしそういった感覚は、もっと人間存在にとって本来的なものではないだろうか。だから本書がそうであるように、そのような感覚を抑圧しないのは至極まっとうな行き方であると思う。

一方、本書にはもうひとつの軸として「アート」がある。ここまで述べたように、多くの民俗学的記述は、残された「もの」た

ちの引き起こす哀惜の情に彩られてしまいがちである。そこに、「アート」の持つ祝祭性や脳天気さをぶつけたところが本書の工夫であり、特徴であると言えるだろう。そのことによって、いわば弔いがお祭りへと転化しているのである。またアートの側にも、人類学を通して人々の営みからの想像力を取り込みたいという欲求があるのだと思われる〔美術手帖編集部2018〕。³⁾ 近年、瀬戸内海はアートで賑わっている。塩江と同様、私のいる大三島でも、建築家の伊東豊雄氏をはじめとする多くのアーティストたちが、町並み再生をはじめとしたさまざまな活動を繰り返している。そのようにあちこちの地域で、人類学から見える歴史や「もの」と、アートとの共創が火花を散らしているのである。

少し注文も書いたが、それを差し引いても本書がたいへんな力作であるということに変わりはない。冒頭に書いたような、日本の至るところで見られている喪失の悲しみを転化し、乗り越える試みが示されているからである。地域の歴史、「もの」のもつ力、そしてアートに関心のある方に、ぜひ手に取っていただきたい一冊である。

引用文献

- 赤瀬川原平. 1987. 『超芸術トマソン』 筑摩書房.
美術手帖編集部. 2018. 『美術手帖 2018年6月号
特集 アートと人類学』 美術出版社.
太田好信. 1998. 『トランスポジションの思想—

3) 「トマソン」と名づけられた不要なものたちの持つ、わけのわからないパワーを「超芸術」と呼んだ赤瀬川原平の視点も、これに近い発想だろう〔赤瀬川1987〕.

文化人類学の再想像』 世界思想社.
柳田國男. 1970. 「火の昔」『定本 柳田國男集 第21巻』 筑摩書房, 149-276.

千田沙也加. 『カンボジア「クルー・チャッタン」の時代—ポル・ポト時代後の初等教育』 東信堂, 2023年, vi+260 p.

吉田篤史*

本書は、カンブチア人民共和国（1979年～1989年、以下、人民共和国と表記）における初等教育を、教員資格をもたず教師に任命された「クルー・チャッタン」のライフヒストリーを通して考察したものである。1975年から約3年間続いたポル・ポト政権では、教員の虐殺や学校教育の停止により、近代教育制度は崩壊に追い込まれた。その後、政権を握ったカンブチア人民革命党は、人民共和国を樹立して教育再建に取り組むことになる。しかし、前政権下での教育制度の崩壊により、その道のりは困難を極めた。本書は、その過程を経て再建された初等教育を教師たちの語りから考察し、末端社会での教育実践の一端を明らかにしている。

本書の概要

本書は序章、第1章から第3章でなる第1部、第4章から第6章でなる第2部、そして終章で構成される。第1部は史資料から政権が掲げた教育構想を分析し、第2部では「クルー・チャッタン」のライフヒスト

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科